

農村社会学的生活研究について

誌名	農村生活研究 = Journal of the Rural Life Society of Japan
ISSN	05495202
著者	児玉, 賀典
巻/号	42号
掲載ページ	p. 98-98
発行年月	1977年10月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



農村社会学的生活研究について

児玉賀典

農村生活研究に対して素人の私が提言などとはまことにおこがましい。だが、素人がものを言えるというのは、その分野が学問的に分化・分解しつくしていないからなのか、あるいは学際的だからか、であろうか。専門の学問分野として確立しにくいのが、農村生活研究であるように思う。農村には農村生活と農業生産という主体的にも空間的にも未分離の領域があって、仮に分けるとしても、概念的に約半分は農村生活の領域である。学問研究はそれを対象領域として分化、分解して、それぞれの科学分野のなかで、それぞれ独自の方法をもって分析を深化する。農村生活研究が農村生活構造論という視点で生活技術分野と別途に展開しつづけているのも学問的分化の過程であるといえるであろう。だが、農村、農家という元来、組織体として総体的生命力をもつものを、方法的に分化しているということ忘却して、現象分析の興味に陥るならば、それはもはや、農村生活研究に求められているニーズに応えることにならないことを常に自戒する必要がある。

社会学的生活研究ではよく農村・村落、農家の変貌ということが報告されるようである。戦後一時期は農村の民主化の浸透によって農家生活の近代化が進展しつつあることをそういう表現で報告されたと思うが、最近では農村社会の混住化により村落の本来の性格が変貌しているなど、報告されている。そのこと自体は正しい結論であるが、「変らないもの」への着目はないものだろうか。というのは、何に対して変貌したとっているのか、読む人によってまちまちであることを恐れるからである。特に、村落に定住してきた農村人が変貌といわれてなるほど変わったのだと自から納得しうるものは何なのか、ということである。

筆者のように、農村恐慌のまっただに、農村で少年期をすごしたものにとって、今日の農家経済は決して貧しいとは思わないが、農村には農村のみじめさはないが方途を失っている苦悩をそこにみる。戦後、食糧増産に専念した頃に農村に育った人達、特に農地改革以後の人達は農村は良くなったと感じているかも知れない。まして、経済成長期に農村で育った人達には、農村とは何だ、という若者が多いのかも知れない。恐らく、今後、農村生活研究を承つぐ人達はあとになって、昭和30

年代後半からの経済成長期が、日本農村にとって昭和恐慌にも増して決定的な歴史的転機をなしていたことに感づくのではないと思う。農村・農家の変貌したというとき、それは何を基準にしているのか、今、明確しておく必要があると思う。それには、農業技術の基本的論理、それに裏付けられた農業生産、農業経営との相対的關係において、不変と可変を社会学的に捉えることが必要ではないかと思う。これは生活研究の長期にして基本的課題といえよう。

農村社会学的方法で農村生活を研究するとき、その研究成果は誰が受取ると考えられているのだろうか。生活構造を社会学的に究明することは学問的に未知の分野も多く、一種の挑戦であり、その面での成果は貴重である。だが、社会学的生活研究は農業経済学、農業経営学との関連で研究の学際的補完の意味で発展してきたという批判は必ずしも否定しえない。いわゆる農村社会現象の解釈理論という意味で人文地理学に類似している。だから、独自の領域での実践性を何を対象として目的づけるかに苦慮があるように思う。研究の対象となる農村、農家はその社会学的問題点を正しく理論的にえぐり出されたときに、それを咀嚼して自力で運動化する性質は薄いものである。そうであるとすれば、媒介項に対して研究成果を提供することがより直接的な実践性ということになると思う。それは、今日では農業改良普及組織に対する積極的な働きかけであろう。幸いにして日本農村生活研究会は、農村生活研究者と農村生活改善普及職員の方々を主たる会員としている。年一回の研究発表会での交流をもとにして相互のコミュニケーションは20年の歴史のなかで育っていると思われる。だが必要なことは日常的問題意識の交流であると思われる。お互い農村・農家のための研究であり普及であるという大義名分は否定する必要はない。ただ、相手が変りつつあることの認識のもとに、研究・普及の対象をどこに求めるか、である。個別農家でなく、地域マネジメントの形成に寄与しつつ、それを対象とする意識が醸成されなければならない。これは単に農村生活研究だけでなく、農業に関する社会科学的研究の共通の問題点でもあると思う。そして、当面する問題であるといえよう。

(中国農業試験場長)